

日本語の慣用的受身文の意味分析

—「仕事に追われる」と「雨に打たれる」の比較から—

神田知哉

t.kanda.997@gmail.com

キーワード：直接受身文 慣用的受身文 意味分析 状態変化

要旨

日本語の直接受身文には、「仕事に追われる」のように対応する能動文が成り立たない、あるいは不自然となるものがある。本稿で慣用的受身文と呼ぶこれらの文は、これまで主語の心理的状态の変化を表現するものだと考えられてきた。本稿では、日本語には「雨に打たれる」のような、自然現象に関する異なる型の慣用的受身文があることを指摘したうえで、これらの二つの型の受身文は、ともに主語に何らかの状態変化が起きたことを含意すること、そして、慣用的受身文に用いられる動詞には、その他の多くの語義で表される行為に起因する状態変化をも含意するように意味拡張が起きていることを示す。

1. はじめに

日本語の直接受身文には、対応する能動文が成り立たない、あるいは不自然となるものが存在することが、これまで指摘されてきた（益岡隆志 2000、村木新次郎 2000、林青樺 2009 など）。本稿では、林（2009）に従ってこの種の受身文を「慣用的受身文」と呼ぶこととする。以下に慣用的受身文の例とそれに対応する能動文を挙げる。

- (1) a. 二人の息子が交代で泊まっているが、仕事に追われて、十分な看病ができない。
(徳永進『カルテの向こうに』 BCCWJ から)
- b. 好奇心に駆られて隼人は豆腐の金を払うと、源助の跡をつけた。
(森村誠一『虹の刺客』 BCCWJ から)
- c. マスターの笑みにつられて、圭一も軽く笑みを返した。
(小杉健治『父からの手紙』 BCCWJ から)
- (1') a.*仕事^{*}が二人の息子を追^{*}う。
b.*^{*/?}好奇心^{*}が隼人を駆^{*}る。
c.*マスターの笑み^{*}が圭一をつ^{*}る。

慣用的受身文が表す事態について、益岡（2000: 55）は「主体が、二格で表される非情物

を機縁(原因)として何らかの心理的状态を経験するという事態が描かれている」とする¹。また、林(2009:72)も慣用的受身文を「Xガ Yニ V-(ラ)レル」という形式とすると、「主語である「X」は「受け手」の立場にあり、「Y」から何らかの形で心理的影響を受けるのである」と指摘している。

このように、慣用的受身文はこれまで二格名詞(句)の指示対象(以下では「二格名詞」)の影響による主語の指示対象(以下では「主語」)の心理的状态の変化を表現するものとしてきた。しかし、実際にはこれに当てはまらないと考えられる次のような例も存在する。

- (2) a. はいている運動靴さえ、雨に打たれ痛痛しい程に傷んでいる。
(吉野道男『熱球児』BCCWJから)
- b. 舟は惰性で走っていき、止まると、むしろ波にもまれて揺れた。
(立松和平『虹色の魚』BCCWJから)
- c. 豊田海曹が風に煽られながら岩を降りていった。
(高野裕美子『マリン・スノー』BCCWJから)

これらの直接受身文も他の慣用的受身文と同様、対応する能動文は成り立たない。

- (2') a. *雨が運動靴を打った。
b. *波が舟をもむ。
c. *風が豊田海曹を煽った。

これらの例は自然現象(や、そのメタファー)に関するものであるため、本稿では便宜的に「雨に打たれる」型の慣用的受身文²と呼び、上述の(1)のような慣用的受身文を「仕事に追われる」型の慣用的受身文と呼び分けることとする。

本稿では、これらの二つの型の受身文は、ともに主語に何らかの状態変化が起きたことを含意すること、そして、慣用的受身文に用いられる動詞には、その他の多くの語義で表される行為に起因する状態変化をも含意するように意味拡張が起きていることを示す。なお、用例の収集には現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)を用いた。

2. 慣用的受身文としての「雨に打たれる」

林(2004)は受身文に見られる多様性と連続性について論じるにあたり、「打たれる」を意味的側面から分析し、慣用的受身文にも言及している。林は「打たれる」を「物理的な衝

¹ 益岡(2000)はこのことから本稿における慣用的受身文を「機縁受動文」と呼んでいる。

² これと似た受身文で「気象受動文(気象受身文)」と呼ばれるものがあるが(杉本武1999など)、気象受動文は一般的には間接受身文とされる「雨に降られる」「風に吹かれる」などの受身文を指すものであり、「雨に打たれる」型の慣用的受身文とは異なるものであると考える。

撃」と「抽象的な衝撃」に分類しているが³、対応する能動文を持たない「打たれる」は、抽象的な衝撃の中でも心的作用によって衝撃を与えられるパターンのみであるとしている。林が挙げている例を以下に示す。

- (3) a. 僕はそういう話を聞きながら、ぼんやりとした悲しみに打たれていた。
 b. ポツダム宣言が受諾されたばかりのとき、ひろ子は、簡明率直な歓喜にうたれた。
 (林 2004: 90)

(3)の例は「二格の「悲しみ」「歓喜」が主語の内部に生起した心的作用を表わす名詞句」(林 2004: 90)であるとされる。すなわち、このパターンは主語の心理的状态を表す「仕事に追われる」型の慣用的受身文であると考えられる。

その一方で、「雨に打たれる」のような例は物理的な衝撃の中でも自然現象によって衝撃を与えられるパターンであるとし、次のような例を挙げている。

- (4) 浜に戻っても彼女たちは雨にうたれたまま声をあげて泣きました。(林 2004: 88)

確かに、「雨に打たれる」は雨が主語に降りかかることを表しており、物理的な衝撃に分類できる。しかし、「雨に打たれる」の例として挙げられている(4)も、対応する能動文は次のように成り立たない。

- (4)*雨が彼女たちをうった。

したがって、やはり「仕事に追われる」型の慣用的受身文とは別に、「雨に打たれる」のような例についても慣用的受身文として分析する必要があると言える。また、慣用的受身文を分析する際には、二格で表されている動作主からの被動者(である主語)への働きかけの方法で分類するのではなく、主語にどのような影響が生じているかを見る必要があると考える。

3. 慣用的受身文が表す事態

3.1. 「仕事に追われる」型が表す事態

志波彩子(2015)は日本語の受身文を細かく分類し、体系的な記述を行っている。日本語の受身文は「有情主語有情行為者受身構文(AA)」、「有情主語非情行為者受身構文(AI)」、「非情主語一項受身構文(I)」、「非情主語非情行為者受身構文(II)」の4つに大きく分類でき、さらにそこから17の下位分類が行えるとする。

志波は対応する能動文がない直接受身文をまとめて体系的に考察してはいないが、「仕事

³ 林(2004)では、「不意に打たれる」や「縄に打たれる」などの成句として意味的にまとまっているものは考察の対象から外している。

に追われる」型の慣用的受身文と「雨に打たれる」型の慣用的受身文のどちらについても能動文が不自然となることを指摘している。

志波は、「仕事に追われる」型の慣用的受身文を有情主語非情行為者受身構文の下位分類である「AI 心理・生理的状態型」とする。この型は「対応する能動文は、不自然な表現になるか、成立しない場合が多く、「何らかの外的なコト（原因）に影響されて、主語に立つ有情者が、ある生理・心理的状态であるということを表わす」（志波 2015: 150-153）。

以上を踏まえて、「仕事に追われる」型の慣用的受身文について分析する。以下に(1)を再掲する。

- (1) a. 二人の息子が交代で泊まっているが、仕事に追われて、十分な看病ができない。
b. 好奇心に駆られて隼人は豆腐の金を払うと、源助の跡をつけた。
c. マスターの笑みにつられて、圭一も軽く笑みを返した。

(1a)では、仕事の存在の影響を受けて、仕事以外に手をつける余裕がないという心理的状态になったことが「仕事に追われ(る)」に含意されており、その後に余裕がないために十分な看病をすることができないということが述べられている。(1b)では、好奇心が生まれた影響から隼人が源助の跡をつけようという心理的状态になったことが「好奇心に駆られ(る)」に含意されており、その後に実際にその行動を行ったことが述べられている。(1c)では、マスターの笑みを見たことで、その影響を受けて圭一も笑みを返そうという心理的状态になったことが「マスターの笑みにつられ(る)」に含意されており、その後に実際にその行動を行ったことが述べられている。

このように、先行研究の指摘にもある通り、「仕事に追われる」型の慣用的受身文は主語の心理的状态の変化を表現するものである。そして、心理的状态の変化は実際の行動に現れることが多く、その場合はその行動が後述されるのだと考えられる。

3.2. 「雨に打たれる」型が表す事態

志波(2015)は、「雨に打たれる」型の慣用的受身文は非情主語非情行為者受身構文の中でも「II 現象受身型 (II 現象)」としている。この型は、「主語に立つ実体が、何らかの自然現象による作用の中に取り込まれることを表す」ものであり、「参照時において眼前に展開する現象を、それを引き起こした原因である自然現象を二格行為者として描写する」(志波 2015: 334)。

そのうえで、志波はこの型について、「この現象名詞の二格行為者は、勢力を持って対象に働きかけて変化を引き起こすような行為者ではなく、自然現象として作用している状況の中に対象を巻き込むだけの存在である」としている(志波 2015: 334)。この記述について、志波の挙げている例を用いて考察する。

(5) 水面が陽に照らされてきらきらしている。 (志波 2015: 334)

(5)では確かに、太陽が水面を照らすことで、水面に何か変化が起きるように働きかけているようには考えられない。しかし、水面は太陽に照らされることできらきらしている（輝いている）様子が後述されている。これは、曇っていて太陽に照らされていない時などには起こらない状態であり、太陽に照らされることによる水面の状態（の変化）を表していると捉えることができる。この型の受身文は「文末に現れにくい」と志波（2015: 334）は指摘しているが、それはこのように主語の具体的な状態変化が後述によって示されている場合が多いためだと考えられる。

同様に、他の例についても分析する。(2)を以下に再掲する。

- (2) a. はいている運動靴さえ、雨に打たれ痛痛しい程に傷んでいる。
 b. 舟は惰性で走っていき、止まると、むしろ波にもまれて揺れた。
 c. 豊田海曹が風に煽られながら岩を降りていった。

「雨に打たれる」は、実際に起きている自然現象としては、被動者である主語に雨が吹きかかるということである。同様に、「波にもまれる」「風に煽られる」は、実際の自然現象としては主語に波が押し寄せること、風が吹きかかることである。そのため、これらの現象自体は特に主語に何か変化を必ずもたらずわけではない。しかし、これらの現象が「雨に打たれる」型の慣用的受身文として表現されると主語に何らかの状態変化が起きたことを含意できるようになるのだと考えられる。

具体的には、(2a)では運動靴に雨が降りかかったことで運動靴が傷んだことが「雨に打たれ(る)」の後に述べられている。(2b)では、舟に波の圧力がかかることで舟が揺れたことが「波にもまれ(る)」の後に述べられている。(2c)では具体的な状態変化は後述されていないものの、豊田海曹に風が吹きかかることで豊田海曹がバランスをとりながら歩くのが難しくなっていることが「風に煽られ(る)」に含意されていると考えられる。

ただし、同じ慣用的受身であっても、どのような状態変化が含意されているかは文脈によって変わる。

- (6) a. 雨に打たれた土の匂いをかぐのは久しぶりだった。
 (石井崇『南スペイン、白い村の陽だまりから』BCCWJ から)
 b. 冷たい雨に打たれてそろそろ紅葉も見頃となったのでしょうか？
 (Yahoo!知恵袋、BCCWJ から)

(6)は(2a)と同じく「雨に打たれる」という慣用的受身を用いた文であるが、(2a)に見られるような状態変化とは異なる。(6a)では、土に雨が降りかかることで、土が通常の匂いと

は異なる匂いに変化することが含意されている。(6b)では、紅葉に雨が降りかかることで、葉が緑から赤に色づくという変化が含意されている。

さらに、メタファーによって表現された「雨に打たれる」型の慣用的受身文についても同様に説明できる。

(7) a. 内側が虹色に輝く貝殻、波に洗われて角が取れたビンのかけら […]

(『スローライフ in ふくしま』BCCWJ から)

b. 千九百八十年代以降、社会主義諸国は自由化と民主化の波に洗われ、千九百九十一年にソビエト連邦は解体した。 (佐々木毅ほか『現代社会』BCCWJ から)

(7a)は「波に洗われる」を本来の意味で用いたものであり、(7b)はその意味がメタファーによって派生されたものである。(7a)では、ビンが波の圧力を受けたことでビンの角が取れたことが「波に洗われ(る)」の後に述べられている。(7b)では、自由化と民主化が波及する様子を波にたとえ、社会主義諸国が自由化と民主化の波の圧力を受けたことでソビエト連邦が解体したことが「波に洗われ(る)」の後に述べられている。

このように、「雨に打たれる」型の慣用的受身文は主語に何らかの状態変化が起きたことを含意しており、その具体的な状態変化は後述されることが多いと言える。

前節の「仕事に追われる」型の慣用的受身文と考え合わせると、二つの型の慣用的受身文はともに主語に何らかの状態変化が起きたことを含意しており、実際の具体的な変化は後述されることが多いということになる。

3.3. 後続文脈との関係

前節までで見たように、慣用的受身文では実際の具体的な状態変化が後続文脈で表現されやすい。この慣用的受身文と後続文脈との関係は、間接受身文にも通じる点である。

高見健一(2011: 65-67)によれば、被害・迷惑の意味を表す間接受身文は、後続文脈で何らかの迷惑を明示する表現を伴うことが多く、間接受身文は必ずしも後続要素を必要としないものの、後続文脈はその適格性を補強する役割を果たしていると考えられる。

(8) a. $\sqrt{?}$ 学生に廊下を走られた⁴。

b. 学生に廊下を走られると、研究の邪魔になる。

(9) a. *花子に歌を歌われた。

b. 花子に歌を歌われると、誰もがうんざりする。 (高見 2011: 66)

(8a)では、学生が廊下を走ったことが話し手の迷惑になったと推測され、迷惑を含意はするが、この文だけでは迷惑の意味を明示はしない。また(9a)では、人が歌を歌うのは普

⁴ $\sqrt{}$ は無印と同様にその文が適格であることを示す。

通のことであり、花子が歌を歌ったことが話し手のどのような迷惑になったのかがわからない。それに対し、(8b) (9b)では「研究の邪魔になる」や「誰もがうんざりする」という迷惑を表す表現が追加されることではるかに適格性が高くなる（高見 2011: 66）。

間接受身文は主語への被害・迷惑の意味を含意するのに対し、慣用的受身文は主語の状態変化を含意する。したがって、高見の間接受身文の分析における「迷惑」を「状態変化」に読み替えれば、間接受身文と同様に慣用的受身文は単独でも用いられるが、後続文脈によって状態変化が具体的に明示されることでより適格性が高くなっていると言えるだろう。

4. 慣用的受身文に用いられる動詞の意味分析

4.1. 慣用的受身文に用いられる動詞の性質

志波（2015: 151-153）によれば、「仕事に追われる」型の慣用的受身文である AI 心理・生理的状态型では通常動作動詞が比喩的に用いられることが多い。また、「雨に打たれる」型の慣用的受身文である II 現象受身型については、「II 現象受身型の要素となる動詞は、自然現象のみを行為者とする動詞は少なく、ほとんどが通常動作動詞である。その中でも対象に変化を引き起こさない、接触動詞や包囲動詞がほとんどである。」と指摘している（志波 2015: 335）。

すなわち、二つの型の慣用的受身文はどちらも通常動作動詞が用いられることが多い。そして、その中でも「雨に打たれる」型の慣用的受身文で用いられる動詞は、ほとんどが本来は対象に変化を引き起こさない動作動詞であるということである。このことは、3.2 節で見たように「雨に打たれる」型の慣用的受身文が主語の状態変化を含意しているということと一見矛盾するように思われる。しかし、この動詞の性質は「仕事に追われる」型の慣用的受身文にも見られるものであり、そしてこの性質こそが、「雨に打たれる」型の慣用的受身文が能動文で用いられない理由である可能性が指摘できる。

分析にあたっては、二つの型の慣用的受身文について、「追う」と「打つ」という動詞をそれぞれ例に取り意味を概観したうえで、意味分析を行う。

4.2. 「仕事に追われる」型に用いられる動詞の意味分析

「追う」という動詞には以下のように複数の語義がある。

(10) a. 洛平が犯人を追うがとり逃がす。

(嵐山光三郎『徒然草殺しの硯』BCCWJ から)

b. 年老いた牧童とその息子が、牛を追ってゆく。

(平田宏『もう一つのソビエト』BCCWJ から)

c. ナポレオンは帝位を追われてセントヘレナで死んだのちも、[…]

(富原真弓『シモーヌ・ヴェイユ』BCCWJ から)

(10a)では、洛平が(逃げて)犯人に接近するという動作を「追う」という動詞で表現している。すなわち、対象に接近するという動作だけを語義に含み、対象の状態変化までは含意しない。そのため、「犯人を捕まえる」などの対象の状態変化が行為の目的であっても、(10a)のようにその目的が達成されない場合もある。この語義が「追う」という動詞において最も基本的な語義であると思われる。

(10b)では、牧童とその息子が牛に働きかけることで牛をその場から動かすという動作を「追う」という動詞で表現している。すなわち、牛を動かすという対象の状態変化までを語義に含み込んでいる。したがって、対象に状態変化が生じていない次のような例は不自然になる。

(10b)?牧童が牛を追ったが、牛は動こうとしなかった。

(10c)では、ナポレオンが帝位の座から下ろされたことが表現されている。このような例では「追う」の動作主が示されることはあまりなく、そもそも動作主自体はつきり定めがたいことも多い。しかし、誰かしらの働きかけがあるからこそ主語は自らの地位を離れなければならないのであるから、「追われる」は動作主による働きかけに起因する対象の状態変化を含意していると言える。したがって、対象に状態変化が生じていない次のような例は不自然になる。

(10c)?ナポレオンは帝位を追われたが、その座に踏みとどまった。

森田良行(1989: 217)は(10b,c)のような「追う」の例を対象を移動させる目的の「追う」であるとし、この場合は動作主は力づくで直接行為として対象を動かすのではなく、対象自身が自ら動くように仕向けるのだとしている。この動作主の行為が仮想され、この語義が受身独自の意味として用いられるようになったのが、(1a)のような慣用的受身文の例であると考えられる。

(1a) 二人の息子が交代で泊まっているが、仕事に追われて、十分な看病ができない。

(1a)では、二人の息子が仕事から何かしらの影響を受けることで仕事以外に手をつける余裕がないことが表現され、それにより十分な看病ができなくなっていることが後述されている。すなわち、あたかも仕事は二人の息子に対して「仕事以外に手をつける余裕がない状態」になるように働きかけ、それに起因するかのように二人の息子に状態変化が起きていることが表現されているのだと考えられる。

このように、「仕事に追われる」型の慣用的受身文に用いられる動詞は、基本的な語義には動作主による行為のみが含まれ、その行為に起因する対象の状態変化は含まれない

が、意味拡張によって独自に状態変化をも含意するようになっていていると考えられる。

4.3. 「雨に打たれる」型に用いられる動詞の意味分析

「打つ」という動詞にも以下のように複数の語義がある。

- (11) a. 虎は、女の頬を、平手で思いきり打った。
(門田泰明『首領たちの欲望』BCCWJ から)
- b. 普通、画を壁に架けるのであれば、上方に支える釘を打ち、紐で額を吊るす。
(羽山信樹『夢狂いに候』BCCWJ から)
- c. 彼がこの地で書き遺した日記は、惻々として読む者の胸を打つ。
(須崎勝彌『カミカゼの真実』BCCWJ から)

日本語の基本動詞の多義的な意味の広がりやを記述した『基本動詞ハンドブック』では、「瞬間的に強い力を加える」ことが「打つ」の基本的な意味であるとされている。また、森田(1989: 186)は、「打つ」という動詞は打つ行為自体を直接の目的とする場合と、それによってある状況を引き起こすことを目的とする場合があるとしている。以上を考え合わせると、瞬間的に強い力を加えること自体を直接の目的とする例が最も基本的な語義だと考えられる。

(11a)では、虎が女の頬に平手で強い力を加えるという動作を「打つ」という動詞で表現している。この例における「打つ」は、対象に強い力を加えるということ自体を直接の目的としているため、最も基本的な語義に当たる。また、この例では対象の状態変化は含意されていない。このような語義から派生してある状況を引き起こすことを目的とするようになったのが(11b,c)である。

(11b)では、トンカチなどの道具を使って釘をたたいて壁の中に入れ込むという動作を「打つ」という動詞で表現している。すなわち、釘が壁の中に入り込むという対象の状態変化までを語義に含み込んでいる。このことは、次の例からも説明できる。

(11b') この壁は硬すぎて釘が打てない。

(11b')では、釘をたたくという動作をしても釘が壁の中に入っていないということが表現されている。すなわち、釘をたたくという動作のみならず、それによって壁の中に入れ込むという状態変化も「釘を打つ」という表現が含み込んでいると言える。

(11c)はメタファーであり、日記が読む者の胸をたたくという具体的な動きは存在しないものの、その動きを仮想することで日記が読む者を感動させるということが表現されている。すなわち、読む者が感動するという対象の状態変化をも語義に含み込んでいると考えられる。

以上を踏まえて「雨に打たれる」型の慣用的受身文である「雨に打たれる」を分析する。以下に(2a)を再掲する。

(2a) はいっている運動靴さえ、雨に打たれ痛痛しい程に傷んでいる。

(2a)では、運動靴に雨が降りかかったことで運動靴が傷んだことが状態変化として捉えられる。すなわち、前節で見た「仕事に追われる」型の慣用的受身文と同様に、状態変化は二格名詞による働きかけに起因するものだと考えられる。ただし、「仕事に追われる」型の慣用的受身文とは異なり、その働きかけは実際のものとして捉えられる。例えば「雨に打たれる」においては実際に雨が主語に降りかかっている。このように、「雨に打たれる」型の慣用的受身文では、自然現象からの対象への働きかけは（意図的なものではないが）実際の動きとして捉えられる。

このように、「雨に打たれる」型の慣用的受身文についても、用いられる動詞の基本的な語義には動作主による行為のみが含まれ、その行為に起因する対象の状態変化は語義に含まれないが、意味拡張によって独自に状態変化をも含意するようになっていると考えられる。

以上のように捉えると、慣用的受身文に対応する能動文が成り立たない、あるいは不自然になる理由としては、二つの型の慣用的受身文はどちらも、能動文で表現しようとする状態変化が含意されない本来の語義で捉えられてしまうため、という可能性が指摘できるだろう。

4.4. 有対他動詞と無対他動詞

前節までの議論は、有対他動詞と無対他動詞という他動詞の分類からも説明できる。早津恵美子（1989）によれば、有対他動詞には働きかけの結果の状態に注目する動詞が多く、無対他動詞には働きかけの過程の様態に注目する動詞が多い。

(12) a. 洗濯物を乾かす。

b. 洗濯物を干す。

(早津 1989: 232)

上記の例文では(12a)が有対他動詞であり、(12b)が無対他動詞である。(12a)は何らかの方法で洗濯物の水分をなくすことを表し、その手段は問題にされていない。それに対して、(12b)は洗濯物を物干し竿にかけるなどの動作を行うことを表し、洗濯物の水分がなくなるかどうかは問題にされていない（早津 1989: 232-233）。

慣用的受身文に用いられる動詞はどちらの型にかかわらず、「追う」「駆る」「打つ」など、無対他動詞であることが多い。すなわち、慣用的受身文に用いられる動詞の本来的な性質としては、動作の対象にどのような変化が引き起こされるかではなく、対象への働

きかけの過程の様態に注目するものが多いということになる。したがって、主語にどのような変化が引き起こされるかに注目する慣用的受身文では、働きかけの過程の様態から結果の状態へ注目が移っていると考えることができる。この論は、多くの語義では動作主の行為に起因する対象の状態変化を含意しない動詞に意味拡張が起きることで、慣用的受身文は独自の意味として状態変化を含意するようになっている、という前節までの議論と一致するだろう。

以上のように考えることによって、次のような例も説明することができる。

- (13) a. 強い雨が頬を打った。 (さだまさし『精霊流し』BCCWJ から)
 b. 夜の雨が草庵の屋根を打つ音を聞いて、二本の脚を思わず前に伸ばしているだけ (久保田展弘『狂と遊に生きる』BCCWJ から)

「雨に打たれる」型の慣用的受身文には、このように一見すると対応しているように見える能動文が存在する。しかし、実際にはこれらの例は慣用的受身文とは対照的に、受身文にすると不自然になる。

- (13') a.?頬が強い雨に打たれた。
 b.?草庵の屋根が夜の雨に打たれた。

慣用的受身文は状態変化を表現するのに対し、(13)では雨が降りかかっても「頬」や「草庵の屋根」には特に状態変化はない。車魯明 (2018) はこのような自然現象名詞を主語とする無生物他動詞文が許容される現象について論じているが、「激しい雨滴が窓を叩く」や「意外に強い川風が頬を打った」のような文は「動きの描写までにとどまり、目的語（の人やもの）に変化が生じたかどうかについて言及されていない」としている（車 2018: 24-25）。すなわち、これらの文は働きかけの過程の様態に注目し、結果の状態には注目していないということである。したがって、「雨に打たれる」も(13)も雨が対象に降りかかるという点では同じであるが、その対象に注目し、対象に状態変化が起きていることを含意するのが慣用的受身文なのだと考えられる。

5. まとめ

対応する能動文が成り立たない、あるいは不自然となる直接受身文である慣用的受身文は、これまで主語の心理的状态の変化を表現するものだと考えられてきた。本稿では、それに対して「雨に打たれる」のような例外の存在を指摘し、それぞれ「「仕事に迫られる」型の慣用的受身文」「雨に打たれる」型の慣用的受身文」と呼び分けることとした。そして、この二つの型の受身文は、ともに主語に何らかの状態変化が起きたことを含意すること、そして、慣用的受身文に用いられる動詞には、その他の多くの語義で表される行

為に起因する状態変化をも含意するように意味拡張が起きていることを示した。

ただし、慣用的受身文は体系的な研究がまだ十分にはなされておらず、本稿で示した他にも例外が存在する可能性は否定できない。また、個々の動詞によって振舞いが異なるため、体系的な研究と同時に意味分析など個別的な研究も行う必要があるだろう。今後の研究で考察を深めていきたい。

参考文献

- 志波彩子 (2015) 『現代日本語の受身構文タイプとテキストジャンル』 大阪: 和泉書院.
- 車魯明 (2018) 「日本語書き言葉における無生物主語他動詞文—許容される条件をめぐって—」 『東京外国語大学日本研究教育年報』 22: 17-34.
- 杉本武 (1999) 「「雨に降られる」再考」 『文藝言語研究 言語篇』 35: 49-62.
- 高見健一 (2011) 『受身と使役—その意味規則を探る—』 東京: 開拓社.
- 早津恵美子 (1989) 「有対他動詞と無対他動詞の違いについて—意味的な特徴を中心に—」 『言語研究』 95: 231-256.
- 益岡隆志 (2000) 『日本語文法の諸相』 東京: くろしお出版.
- 村木新次郎 (2000) 「ヴォイス」 中村明 (編) 『別冊國文學』 53: 132-135. 東京: 學燈社.
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』 東京: 角川書店.
- 林青樺 (2004) 「動詞の意味から見た受身文の多様性と連続性—「打たれる」を対象として—」 『国語学』 55(4): 85-99.
- 林青樺 (2009) 『現代日本語におけるヴォイスの諸相—事象のあり方との関わりから—』 東京: くろしお出版.

資料

- 国立国語研究所 『基本動詞ハンドブック』 (<https://verbhandbook.ninjal.ac.jp>) [2020年4月アクセス]
- 国立国語研究所 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』 (https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/) [2020年4月アクセス]

A Semantic Analysis of Idiomatic Passives in Japanese: Comparing “*shigoto ni owareru*” and “*ame ni utareru*”

Tomoya KANDA
t.kanda.997@gmail.com

Keywords: direct passive, idiomatic passive, semantic analysis, change of state

Abstract

Some direct passive sentences in Japanese (e.g. *shigoto ni owareru*) do not have well-formed active counterparts. Called “idiomatic passives” in this paper, these sentences have been regarded as passives that express some psychological change on the part of their subjects. After pointing out that Japanese has another type of idiomatic passive, which pertains to natural phenomena (e.g. *ame ni utareru*), this paper argues that these two types of passive both imply some change of state occurring in the subject, further suggesting that the semantics of the verbs used in idiomatic passives have been extended to include the change resulting from the action they denote in most other uses.

(かんだ・ともや 東京大学大学院)